

資料紹介 (明治国語学史参考資料)

帝国大学文科大學に国語研究室を興すへき議

謹而惟るに我大日本帝国の国語は 皇祖 皇宗以来我国民的思想の顕表したる者にして所謂大和民族の精神的血液たる者なり 人種の結合之に頼りて鞏固を増し教育の実行之に拠りて国民的性質を帯ふ 故にこれか過去に於ける歴史を討究しこれか現在に於ける状況を洞察し 而して後にこれか未来に於ける隆盛を希図するは当に国家の自ら為すべき義務と謂ふへし 此れ立憲の制既に確立し教育の方針已に一定せる今日に於て今又更に喋々を要せざる者なり 況や帝国の版図新に拡張せられ国光の闡揚実空前なる際に於てをや 唯此上にて吾輩国民たる者の熱心攻究すへき点は如何に其義務を尽すへきかの手段にあり

帝国大學は國家の須要に應ずる學術技芸を教授し及其蘊奥を攻究するを以て目的とする所なれば即其分科たる文科大學は應に進んで此重要な國語問題を解釈すへき責任を有する所とす 是に於て小官は我文科大學内に其研究室を創立し茲に其研究資料を網羅し茲に有為の子弟を教育して緻密なる科學的知識及方法を以つて此廣大深遠なる事業の各方面より漸次合期的の解釈を試み行く事の最良策たることを信す

かくの如にして此研究事業其歩を進め全國の教育これか為に其趣を改め東洋の言語学こゝに其中枢を得るに至らばこれ帝國のため世界のため最も慶賀すへき事ならずや

然れども事は其始を慎む輕率大事に臨むは危険の甚しき者なり且已に事業に着手する以上は些少の費目を節減して他日の發達を防

碍すへきにあらず かくの如きは小官の最も屑とせざる所故に今第一着として左の予算の下に左の數事項を討究する事を始め余は皆他日俊秀の士の起るを待たんと欲す 伏して高慮を煩す

明治廿八年 月 日

文科大學主任 上田 万年

帝國大學總長 浜 尾 新殿

研究に関する事項

一 國語に関する著書を網羅しこれを研究室に備へ附くる事

附其學科的人名的書名的分類目錄を編纂する事及び貴重にして且必要な書籍は出版に従事する事

但第一次の事業の一部は既に博言學教室に於て着手し居る者なり

二 研究室に當分十二名の研究生を置く事

但學生にして志願する者少き時は有志研究生を募集すべき事

三文典及大辭典(他日帝國大學に望むへき大事業)の編纂準備に着手すへき事

四方言攻究の事

五 教育上必要な事項を攻究する事

仮令は文字の事仮名遣の事小學生徒に必要な語彙の事其他読書作文教授法等に関する事項等の如し

明治三十年度概算書類

歳出之部

三十年度国語研究室費用概算額

俸 給 金九百円 但助手六給二人、九給一人

庁 費 金九百四十参円八十銭

旅 費 金参百円

雑給及雑費 金貳百拾九円

合 計 金貳千参百六拾貳円八十銭

〔解説〕

右に掲載した文書は、先年東京大学文学部国語研究室を整理した際に見出されたもので、明治の国語研究の一つの濫觴を知る上に興味あるものと考へられたので、「国語学」誌に掲載方を依頼したものである。本文書は、「東京帝国大学文学部」名の入った半紙判用箋五枚に認められたもので、恐らく国語研究室設立の議案の草案に基いて、筆写し置かれたものであらうと推定されるものである。因に、右文書には、所々に濁点が施されてゐるが、原議案には、一般の法律文と同様に、右の符号は無かつたものであらう。

東京大学国語研究室については、「東京帝国大学学术大観」の総説・文学部編に、

文学部の研究室は本学が東京帝国大学となつた直後、明治三十年に国語学・心理学の二科に設けられたのを嚆矢とし（一九六頁）

とあるやうに、東京大学文学部としても、最初に設けられた研究室であり、その設立の趣旨は、前掲書に、

明治三十年九月には新に国語研究室が設けられ、上田教授がその主任となつた。これは同教授が西洋のセミナーになつて国語学の研究と指導に便する為に設置を図つたものといふ（二一五頁）

とあるので、ここに掲げた文書の文面に従へば、特に国語研究室に関しては、明治以来の国語問題の解決といふことが、本研究室の設立を促した大きな動機となつたことが知られるのである。右の案文について、我々の興味を感ずることは、上田博士によつて構想された国語研究室の性格といふものは、今日の諸大学の持つ研究室が、学生の研究勉学のために設けられた機関であるのと相違して、多分に、国家的な調査研究の機関としての性格を持つものとして考へられてゐることである。これは、明治三十五年に設立された国語調査委員会の性格に近いもので、上田博士が右委員会に対する構想を、先づ大学内に実現しようとしたところに、国語研究室が設立されたことと見ることが出来るのである。そのことは、右に掲げた「研究に関する事項」の中にも端的にうかがふことが出来るのである。この研究事項の計画は、研究室が設立されてから、逐次実行に移されたものやうで、前掲の「学术大観」にも、

同研究室の事業としては、助手保科孝一・同新村出・同八杉貞利等を各地に派遣して方言調査を行はしめ、又助手吉沢義則・同橋本進吉・同柴田猛猪を近畿地方に出張せしめて国語史料を採訪せしめた。又赤堀又次郎（後、講師となる）は言

語取調所からの引継ぎの事業として、同研究室において「国語書目解題」を編した。これは明治三十五年に刊行され、国語学研究に資する所が多かつた(二一六頁)。

と記されてゐる。因に、橋本進吉博士が、同研究室助手として勤務したのは、明治四十二年三月以降であるから(「国語学論集」中の「橋本進吉博士略伝」による)、右のやうな調査研究は、その当時まで継続してゐたことが知られるのである。しかし、明治三十五年国語調査委員会設立以後は、右のやうな研究事項は、次第に同会に移管され、研究室は、学生のための研究室としての性格に転じて行つたものと思はれるのである。

(時枝誠記)